

第76回全国産業安全衛生大会，緑十字展2017 in 神戸

基礎教育支援グループ 三間 達也

1. はじめに

平成29年11月8日(水)～10日(金)まで神戸市において、中央労働災害防止協会の主催で開催された第76回全国産業安全衛生大会と、同時に開催された緑十字展2017ー働く人の安心づくりフェア in 神戸ーに参加した。本大会と緑十字展は毎年いずれかの大都市で開催され、1万人以上(今回は主催者発表では1万2千人)参加者する日本で最大の労働災害防止対策の共有と充実を図ることを目的としている。また、緑十字展は安全衛生保護具等の見本市で様々な工夫を凝らした保護具に関する情報を得ることができる。

2. 研修内容

【第76回全国産業安全衛生大会】

「第1日」総合集会(ワールド記念ホール)

第1部の開会式、表彰式、大会宣言の後、第2部で厚生労働省労働基準局安全衛生部長・田中誠二氏による講演「労働安全衛生行政の動向」と、理化学研究所多細胞システム形成研究センター網膜再生医療研究開発プロジェクト・プロジェクトリーダー高橋政代氏による特別講演「網膜再生医療の開発～研究開発におけるリーダーシップ～」を聴講した。

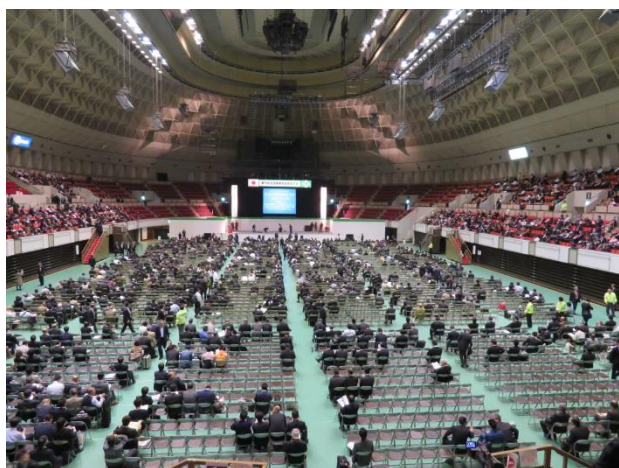


図1 総合集會会場

田中氏の講演では全産業の死亡災害は5年で15%減少したものの、平成29年死亡者数は対前年比で9.6%増加(8月速報値)しており関係業界に死亡災害撲滅に向けた緊急要請を行ったことや、死傷災害件数は近年ほとんど変わりがなかったことが報告された。また、最近のトピックスとして過労死等の労災認定状況で脳・心臓疾患が260件、精神障害が約500件発生していることや、ストレスチェック制度の実施状況などが報告された。さらに、石綿使用建築物の解体棟数は2028年がピークで、今後40年は続くと予想されることも報告された。

眼科医である高橋氏の特別講演は眼の構造についての基本的な構造の解説から始まり、網膜の異常とその治療という目的から研究した経緯が語られた。目標に向かうため遡って考え明確なビジョンを描くという方法が、研究推進のリーダーとして役立ったとの言葉が興味深かった。

「第2日・第3日」分科会

(神戸国際会議場・神戸国際展示場・神戸商工会議所・神戸ポートピアホテル)

2日にわたり14の分科会が開催された。

2日目は「労働安全衛生活動」、「安全衛生教育」、「防災・危機管理」、3日目は「化学物質管理活動」の分科会で企業の発表や講演を聴講した。

「化学物質管理活動」分科会は2年前の名古屋では化学物質リスクアセスメント義務化の直前であったことから、会場に入りきれない程の人数が集まったが今回は参加者が少なく、午前の最後に行なわれたノーベル化学賞受賞者の白川秀樹先生の講演「知ること～セレンディピティーと待ち構えた知性～」のみ会場が満員となった。「知っていることと理解していることは違う」など興味深いお話に感銘を受けたが、聴講しているうちに高橋氏の発想の仕方は正に白川先生の仰

っていることそのものではないかと思われた。

午後は厚労省労働基準局安全衛生部化学物質対策課長の奥村伸人氏の特別報告「化学物質規制の経緯と今後の方向性について」の中でリスクアセスメント対象物質が2018年7月に672物質(現行663物質)に拡大する予定であること、今後は作業環境管理(場の管理)から欧米並みに個人ばく露の管理に向かうであろうことが報告された。また、SDS交付対象物質の適用を受けない物質が規制対象物質の代替品として用いられる動きに対し、データの無い有害性未知の物質が新たな健康被害を招く危惧から、国が個々の化学物質を指定し規制するのではなく、国連GHSに基づき事業者が自ら有害性を特定する仕組みへの転換の必要性を示唆された。

その後、化学物質管理実践講座が行われ、東京工業大学総合安全管理部門特任教授の橋本晴男先生による「戦略的なリスクアセスメントの進め方、および実測値を用いる評価手法の特徴と選択のポイント」、中災防労働衛生調査分析センターの山田憲一氏(日本産業衛生学会産業衛生技術部会個人ばく露測定に関する委員会副委員長)による「実測値を用いないリスク評価手法の特徴と選択のポイント」と題した講習を受講した。

橋本氏の講演ではリスクアセスメントは1.事前調査と計画(戦略)、2.リスクアセスメントの実施、リスクマネジメントの実施の3段階で進めること、リスク評価の手法(戦術)は多数あるが実施し易さ、必用な専門知識、コストなどを勘案し、簡単な手法から精度の高い手法を臨機応変に適用すればよいことを指摘された。また、作業状況の観察結果や過去の評価結果等と実施者の経験、技術的な常識を加味した判断「事前調査に基づく判断」も有効であると述べられていた。検知管は取り扱いが容易で低コストというメリットがあり、厚労省が公開した「検知管を用いた化学物質のリスクアセスメントガイドブック」について、そのポイントを解説された。

山田氏の講演では実測値を用いない簡易的な手法であるコントロール・バンディングを基本とした方法や、それより精度の高い手法である数理モデルを用いる方法など、化学物質の健康障害(有害性)のリスク評価手法を中心に、それぞれの特徴と選択のポイントを解説されたが、内容を十分に理解するには今後かなりの勉強が必要と思われる。



図2 化学物質管理実践講座講師

【緑十字展】(神戸国際展示場1・3号館)

大会1日目が午後からの開催であるため、午前中は同時開催された緑十字展で安全衛生保護具に関する見本市に行った。眼は情報の大部分を取得する重要な器官であり、有害物の体内への取り込みの多くが呼吸器であることから、保護メガネとマスクを中心に情報収集を行った。

3. おわりに

今回の大会は各分科会の会場が徒歩5分程度の範囲に集中していたため会場間の移動に時間を取られることが少なく、興味のある講演を聞き逃すことがほとんどなかった。

化学物質管理実践講座で得られた知識を、大学の化学物質リスクアセスメント実施に貢献できるようにさらに学ぶ必要がある。白川先生が仰ったように「知っているだけではだめで理解することが大切」との言葉を肝に銘じて。